

満月の夜だけの魔法

ミキカイム

「満月の夜だけの魔法」

【材料】

月の欠片・人魚の涙・雪見草の花びら・石英

【注意】

満月の夜にしか効果を発揮しません。

思いを込めて作りましょう。思いが強くないとうまくいきません。

花を咲かせましょう

きれいな花を咲かせましょう

誰も見たことのない花を

世界にたった一つの花を

花を

花を咲かせましょう

「何、その歌？」

読んでいた本を閉じてソラはリオを見た。

「今度師匠から新しい魔法を習うんだ」

リオは笑顔で言った。

「新しい魔法とその歌と何か関係あるの？」

ソラはリオに尋ねるが、リオはただただ笑顔でいるばかり。

ソラはそれ以上聞かず、また本を開いた。

「また失敗だ……」

リオはがっくりと肩を落とした。

「どうしてうまくいかないんだろう？」

リオはもう一度本を見た。

「書いてあるとおりにやってるのになあ。何が悪いんだろう？ やっぱり才能ないのかな……」

ため息をひとつつく。もう何度失敗したかわからない。けれど、

「ソラに見せるんだ。絶対、絶対うまくいかせるんだ。そしたらきっとソラだって……」

花を咲かせましょう

きれいな花を咲かせましょう

誰も見たことのない花を

世界にたった一つの花を

花を

花を咲かせましょう……

「どうしてソラは笑わないの？」

少し前、リオはソラに聞いた。ソラはいつも本を読んでいて、めったに笑ったり怒ったりすることがない。

「おかしくないのに笑えるわけないよ」

「怒りもしないよね」

「リオは私を怒らせたいの？」

「違うよ。どうしたらソラは笑うのかなって思ったんだ」

「どうして？」

「だって、笑ったほうがソラはきっと、もっと可愛いよ」

ソラはそれ以上何も言わずに、本で顔を隠してしまった。

「きっと笑ってくれる。これだったらソラはきっと笑ってくれるはずだ」

リオはまた本を見て作業を始めた。

「どうしたの、リオ？ こんな時間に外に行こうなんて」

「うまくできたんだ！ ソラに見せたい魔法ができたんだ！」

満月の野原の下、リオはソラを連れ出した。

「見ててね？」

リオはそう言うのとポケットからピンを取り出した。そしてふたを開け、中に入っていた粉をあたり一面にまいた。

金色の粉が辺り一面に広がってきらきらと光っていく。さらさらと音を立てて。

「わぁ！」

ソラはきらきら広がっていく金色の光に目を奪われた。

「きれい……リオ、これとてもきれいね。月の光にきらきらしてとてもきれい」

見とれているリオの顔はいつの間にか笑顔になっていた。

「やっぱり！」

「なあに？ 何がやっぱりなの？」

「やっぱり笑ったほうがソラはかわいいよ！」

ソラはリオの顔を見たまま黙ってしまった。

「それに。それにね、ソラが笑うと僕、とっても嬉しいんだ。胸の辺りがポカポカしてくるの。それで僕も笑顔になれるんだ」

「私が笑うとリオが嬉しいの？ なんだか変なの」

「変かなあ？」

「うん変。と一っても変」

そういうとソラはまたきらきら光る金色の魔法をみた。くすくすと声を上げてソラは笑う。

「変でもやっぱりソラが笑ってくれると嬉しいや」

リオとソラは長い時間きらきら光る野原を見ていた。

帰り道、二人は手をつないで家に帰っていった。

「そういえばリオ、あれはなんていう魔法だったの？」

「あれはね、『ソラを笑顔にする魔法』だよ」

花を咲かせましょう

きれいな花を咲かせましょう

誰も見たことのない花を

世界にたった一つの花を

花を

花を咲かせましょう

これは魔法

大好きな君を笑顔にするための特別な魔法

君に笑顔の花を咲かせる魔法

リオの歌声は夜空の満月に吸い込まれていった